# 世界舞台に医療支援

## 読売国際協力賞フォーラム「AMDAと日本の国際貢献」

第二回読売国際協力賞を受けたAMDA（アムダ＝アジア医師連絡協議会）の受賞記念フォーラム「AMDAと日本の国際貢献」が八日、大阪・千里中央のよみうり文化ホールで開かれた。基調講演とパネルディスカッションの二部構成で、国際協力の分野におけるNGO（民間活動団体）の役割とPKO（国連平和維持活動）、ODA（政府開発援助）などを通じたNGOと政府との連携、協力の在り方などについて活発な意見の交換が行われた。

### 基調講演

AMDA代表　菅波　茂氏

湾岸戦争の時、日本が百三十億ドルという多大なお金を出したにもかかわらず、感謝されなかったのはなぜか。世界には私たちとは違った規範があるからではないか。

現在の世界の規範はプロテスタンティズム（新教の教義）と言える。十六世紀に宗教改革が起こった時、（ローマ教会には）免罪符という風習があった。プロテスタントはこの金で何でも解決できるという考え方を糾弾した。

湾岸戦争の時の日本の行動もプロテスタントの考え方からみれば、「金で何もかも済ませよう」ということで、感謝されるどころか、卑しむべき行動と映ったのではないか。

プロテスタンティズムの考え方のエッセンスは、ヒューマニズムと責任、公平さの三つになる。

ヒューマニズムからは「参加する」という規範が導き出される。放置できない状況が世界のどこかに生まれた時、支援に参加しないことには、その国は良心がないと見られても仕方がない。従って、緊急救援のシステムを持っているか、いないかで、その国の良心が問われる。

二十一世紀に一番大変になるのは多様な価値観の存在だ。いろいろ価値観の違う人たちがどうやって共存していくかという問題になる。AMDAは多国籍のアジアの医師が所属しており、多言語、多宗教、多文化という多様性を包み込んだ組織だ。うまくいっているのは異質なものを超える共通の使命感があるからだ。私たちを必要としてくれる、医療を求める人たちがいるということが、私たちの職業的倫理感を高めている。

医療救援活動を通じて知ったことは、人道援助にも原則があるということだ。

まず、だれでも人道援助には参加したいという気持ちがある。さらに、援助を受ける側にもプライドがある。アフリカの人たちからも人道援助に参加できるシステムを作ってほしいという要望が相次いでおり、時機が来たらアフリカの医師たちも正式メンバーとしたい。

私たちは平和というものを最高の目標に置いている。世の中に大切な価値観は無数にあるが、どれも平和であってはない。すばらしいと感じる。今まではそれぞれのNGOが現地で連絡もとらずに活動することが多かった。協力できるような体制にする必要がある。

また、平和とは、戦争がない状態ではない。だれもが餓死の心配がなく生活できる状態のことを平和と呼びたい。

杉下　平和が壊れる要因として▽貧困▽不安定な政治▽人権の侵害▽環境の破壊――などが挙げられる。これまで平和に対する日本の支援は官民ともに経済開発に偏っていたきらいがあった。

私はNGOをプロフェッショナルな集団と考えている。町のボランティアや哲学のない団体とは区別している。NGOは専門家集団であるべきだ。

――NGOの今後の課題は。

菅波　善意だけでは通用しない。プロの知識や技術を身につけることが求められている。プロを養成していくためには、生活の保障も必要となる。国連機関や現地政府、日本政府、他のNGO、日本国民のいずれもが理解を示し、システム化して動くことが緊急援助には欠かせない。そのためにもプロフェッショナル化は不可欠だ。

平田　しかし、プロばかりではなく、市民参加の体制を整えていかねばならない。最初は素人集団であっても、国際協力の体験をきっかけとして、専門的な知識を身につけていくことが多い。日本は市民参加の面で他国に遅れている。

クリスティーヌ　NGOという言葉の意味が「非政府組織」であることを忘れてはならない。政府がNGO活動にあまりに介入しすぎると、NGOとして国の政策からはずれる活動ができなくなる。

高野　五、六年前までは、政府に批判的なNGOもあり、両者は必ずしも友好的な関係ではなかった。冷戦構造の崩壊以後、専門集団といえるNGOも育ってきて、建設的な協力関係を築けるようになった。ODA予算の中でも、NGOの支援予算は増えている。私はいい方向に進んでいると楽観している。

初めて成り立つ。戦争を防ぐにはお互いが尊敬し、信頼を持つ状況がなければだめだろう。

人道援助、相互扶助、プロジェクト中心主義というのが私たちの三原則で、相互扶助という考え方に自信を抱いたのは阪神大震災の時だった。この時、日本中の人たちが何かをしたかった。困っている時はお互い様というのが相互扶助だ。

お互いに汗をかくパートナーシップの中から、私たちの最終目標である相互信頼感が生まれてくる。その考え方の中から様々なプロジェクトを行ってきた。貧困に対応するため、もっと社会開発が必要なことも理解しており、今後、そのためのアプローチもしていきたい。

## 相互扶助の理想　参加が前提条件

### 開会あいさつ

水上　健也
読売新聞大阪本社社長

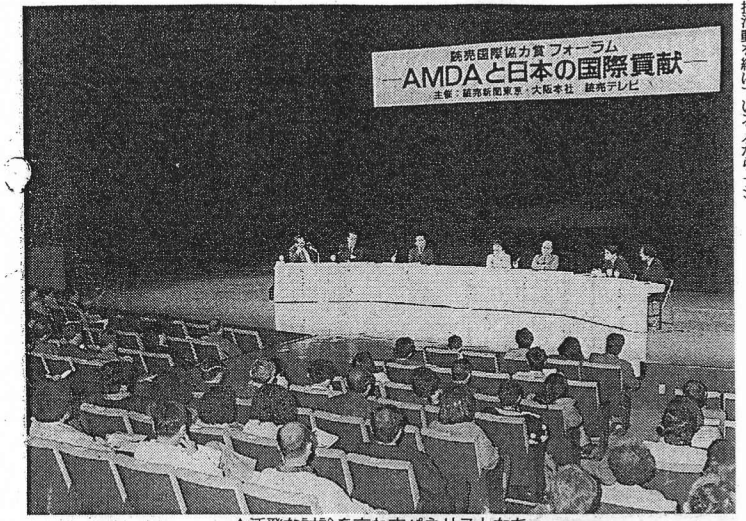
このフォーラムのタイトルになっております「読売国際協力賞」は、読売新聞の創刊百二十年に当たる昨年、国際社会における日本の責務の担い手として活躍する日本人を支援するため創設しました。

第一回の受賞者、緒方貞子・国連難民高等弁務官に続き、今年はカンボジア、ソマリア、ルワンダなど世界の災害、紛争の現場で緊急援助の活動を展開している医療NGOのAMDAが選ばれました。

AMDAの最大の特徴は、アジアを中心に多数の医療関係者のあり方ではないかと思います。

AMDAは関西生まれのNGOであります。関西の皆さんとともに今回の受賞をお祝いし、併せて支援と協力の輪を広げたいと企画したのが本日のフォーラムです。活発な意見の交換によって有意義なフォーラムになることを期待します。

## 緊急時への対応重視　名誉大使の自覚大切




▲活発な討論を交わすパネリストたち

### パネリスト

（敬称略）

AMDA代表　菅波　茂
AMDA副代表　高橋　央
総理府国際平和協力本部事務局長　高野　幸二郎
関西NGO協議会議長　平田　哲
タレント　マリ・クリスティーヌ
読売新聞解説部次長　杉下　恒夫

コーディネーター
飯沼健真
・読売新聞調査研究本部長

クリスティーヌ氏

高橋　央氏

高橋　クリスティーヌ

緊急時への対応重視

名誉大使の自覚大切

人道支援、復興・開発、平和の三点は不可分で、すべてを見すえた対応が求められている。

クリスティーヌ　「国際協力のために自分は何ができるのか」を考えてきた。私の場合、自覚をもってほしい。一人が悪いことをすると、日本人全体に悪印象をもたれてしまう。

平田　基礎的、人道的な緊急援助として、医療、食料、水、家、識字教育の五つがある。これら社会開発関係の活動を含め、人権や環境問題に取り組んでいる日本のNGOは現在、約三百を数える。

ほとんどは現地に長く滞在する定着型で、緊急援助の面では弱かった。現地にいつでも援助に行ける体制を敷くAMDAの活動は、なかなかできることで海外での体験をいろいろな場で話すことや、資金集めの協力などを続けてきた。時には人寄せパンダを承知で、ボランティア活動に取り組んでいる。

人それぞれに国際貢献のやり方があるはず。日本にいても、自分の役割を見いだすことが大切だ。海外では体を張って国際支援に取り組んでいる民間の日本人がたくさんいる。しかし、日本政府のサポート体制は十分とはいえない。ODAの予算をもっとNGOに回して、サポートを充実させてほしい。

そして、海外に出かける時は、一人ひとりが名誉大使としての

# NGOのパイオニア

## 「AMDAと日本の国際貢献」

読売国際協力賞フォーラム

## 基調講演

### 顔の見える援助 官民協力に期待

前駐ケニア大使　佐藤　ギン子氏

地球はますます小さくなっている。

かつて萩原朔太郎は「フランスはあまりに遠し」と嘆いた。戦後も、日本人はアメリカ行きを長く夢見た。古いアメリカ映画「旅情」は、秘書の主人公がイタリアを旅する物語だったが、「アメリカは、秘書が休暇でイタリアに行けるほど豊かなのか」との感慨を抱いた覚えがある。

現在の日本は、年間の海外渡航者が千三百万人にも達している。豊かさと交通・通信の発達は隔世の感がある。戦後の復興過程に自分のことで精一杯だった日本にも、今では「世界で困っている人を助けたい」という若者が出てきた。

日本は、国としても世界屈指の貢献をしている。世界の開発援助総額は一兆一千億円超だが、日本は約二〇%を出資する最大の援助国だ。国連の通常予算も、アメリカに次いで二四%を負担している。

これらがほとんど、税金でまかなわれていることを認識する必要がある。日本人は、知らず知らずのうちに、大変な国際貢献をしているのだ。

ケニア駐在中、日本のODAによる建物や施設の完成式典に招かれるたび「日本人が営々として働いて築いたものを、友好の印として贈る」とあいさつした。そのたびに大変な感謝の言葉を受け、日本人の勤勉さがたえられた。日本の援助は海外で高く評価されている。

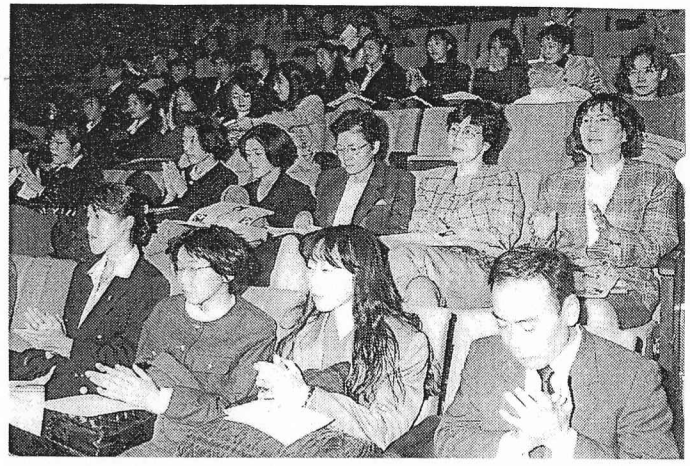
「日本の援助はカネだけで、『顔』が見えない」との批判もある。だが、国際協力でまず必要なのは資金だ。カネを出すことを誇りにこそ思え、恥じることはない。

ただ、その金額に比べて「顔」が見えにくいのは事実だ。税金がムダにならない資金援助に人を送り出し、大きな存在感のある国もある。

最近では、日本でも多くの人が、知恵を出すことを誇りに思う。

「目に見える国際貢献」と金がムダにならない意味では、個人やNGOの力が重要だ。ただ従来は、現場で日本人が活躍する姿は、なかなか見られなかった。かたや、資金援助の規模以上の力を発揮している国もある。

世界を舞台にした民間の活動がさらに広がり、より多くの日本人が活躍することを期待する。日本のNGOは、これから成長の時代を迎えると言える。



▲国際貢献を巡る論議などに聞き入る市民ら（8日、大阪・よみうり文化ホールで）

## ODAで積極援助も 組織間の連携が課題 ボランティアとは別

高野　平田　杉下

高野幸二郎氏

平田　哲氏

杉下　恒夫氏

飯沼　健真氏

――協力におけるアマチュアリズムとプロフェッショナリズムとの関係はどうあるべきか。

杉下　私はアマチュアを切り捨てると言っているのではない。底辺を広げれば広げるほど、プロも増えてくる。ボランティアには志願兵という意味がある。有給の場合はNGO「無給の場合はボランティア」と使い分ける場面もある。

政情不安定なところに、気持ちだけで行っても現地で役に立たない。阪神大震災の時も、同じようなことがあったと聞いている。現地の人々にとって本当に役立つ支援を考えなければならない。

菅波　緊急援助を行うためには、輸送手段や通信手段、活動拠点、大量の人と物、後方支援体制を確保する必要がある。阪神大震災で現地入りした際、海外での活動を生かすことができた。

高橋　プロとアマの問題はいつも論議となる。阪神大震災の際も、素人のボランティアを受け入れるかどうかでスタッフの間で意見が分かれた。結局、千五百人を超える学生らとともに活動した。たしかに混乱もあった。しかし、地元に帰った参加者の中には、地域のボランティア活動で主導的な役割をしている学生やサラリーマンもいる。

――NGO間の連携を強めるにはどうすべきか。

平田　NGOは自発、自主性が基本で、ユニークな個性もあるので連携は難しい。阪神大震災でいえば、それぞれの団体が被災地へ飛び込んで、行政の空白を埋める補完的な活動を展開した。その後から横のつながりが出来てくるのであって、最初から「ネットワークありき」ではない。そもそも日本全体のNGOが育っておらず、組織も弱く、どう連携していくかは今後の課題だ。

ODAに占めるNGOの位置は。

高野　ODA予算の技術、無償資金協力約五千五百億円のうち、草の根無償資金協力などを含めてNGO支援関係は約三十八億円になる。金額はまだ小さいが、政府がやるよりNGOにやってもらった方が良いと考えたケースには積極的に援助している。

クリスティーヌ　日本は援助活動などで海外にいる邦人に対してどこまで保護してくれるのか疑問だ。と言っても、NGOは助けを必要とする国には行くべきで、そのことが国際社会における「日本の顔」作りにつながっていくと思う。

私は日本のPKO部隊が行く前に、現地の子供たちの勉強を助けるために大量のパルプを調達してカンボジア入りし、機関銃を突き付けられるなど怖い思いをした。国はもっとNGOの安全を確保すべきだ。

――PKOとNGOの連携は。

菅波　ザイール・ゴマでは、AMDAと自衛隊は密接に協力した。ルワンダから福島県に行っていた留学生をAMDAが雇っており、自衛隊がゴマ国立病院で手術する際には派遣した。また自衛隊の無線の周波数と同調して非常事態に備えたりした。NGOは人道援助、PKOは主に国益のため、と立場は違うが、うまくいった、と思う。

高野　PKOの「国益」は国連に協力し、国際社会の「公益」を守ることだ。人道援助が目的になることも多い。たとえば、ソマリアで港や空港が武装集団に占拠されて救援物資が奪われ、赤ちゃんがどんどん餓死していた。国連軍が空港や港、道路などを確保して初めてミルクが届き、NGOが現地入りして援助活動をすることも可能になった。

クリスティーヌ　私は海外生活が二十年を超えるので、外から日本人がどう見られているのかわかるつもりだ。日本のPKOは行き先を考えるべきで、アジアよりアフリカ、中東方面に救いの手を伸ばすと良い。アジアは日本の植民地支配の歴史が身近にあり、受け入れ側に恐れがあるからだ。アフリカなどは英、仏の植民地だったから、日本人が行った方が喜ばれる。

杉下　PKOとNGOでは、その規模が違うほか、派遣される時期も違う。PKOは人や資材を大量導入できるが、NGOのような迅速性は欠ける。PKOには復興への道作りなど政治的行為も要求されるが、NGOは人道支援が目的であり、紛争中の一番困っている時に政治や宗教に関係なく行くことになる。

クリスティーヌ　米国では日本の青年海外協力隊にあたる平和部隊に参加したことが社会的に評価される。履歴書にも載るし、その価値もある。入試でも「あなたは地域のボランティアを何時間しましたか」という質問がある。日本では、外国で活動してきた人に「ご苦労さん」と声をかけるだけですます傾向がある。彼らをもっと活用して、貴重な経験を生かす方法を考えないとだめだ。

――最後にAMDAに望むことは。

平田　AMDAはNGOの中で、傑出したパイオニアとして尊敬している。持てる力を継続して生かしていくために、ほかの医療NGOとの協力ネットワークを作ってほしい。

菅波　国際貢献に関して「AMDA国際大学」を岡山県内に作る構想がある。NGOに関心がある皆さんはぜひ入学してほしい。

### AMDA

八四年八月、岡山市を本拠に、菅波代表がアジアでの医療救援活動と研修を目的に発足させた。その後、活動の場をアジアから世界に拡大。昨年から今年にかけて、ルワンダ、旧ユーゴ、サハリンなど国際的に注目を集めた紛争、災害の最前線に、医師や看護婦らを派遣、緊急救援活動を行ってきた。

活動内容は人道的医療と日常の地域コミュニティーにおける保健医療に大別される。海外に十四支部を置き、会員数は日本に七百人、アジア十五か国に二百人。六月には日本の医療NGOとしては初めて国連認定のNGO（カテゴリーII）に登録された。

### 読売国際協力賞

国際協力の分野で際立った活躍をし、国際社会への貢献と協力の重要性を身をもって示した個人・団体を顕彰する。国際活動への理解と、日本の積極的な参加を促そうと、読売新聞が創刊百十周年を迎えた昨年、創設した。第一回受賞者は、緒方貞子・国連難民高等弁務官。

選考委員会のメンバーは浅尾新一郎・国際交流基金理事長、小和田恒・国連大使ら六人。

主催　読売新聞社、読売テレビ
後援　外務省、大阪府、大阪市、国際協力事業団、国際交流基金